

発達心理学会第22回大会において以下のようにシンポジウムを企画した。

エコラリアの意味を問い直す

—発達支援のために—

企画：	言語発達分科会	
司会：	高橋登	(大阪教育大学)
話題提供者：	田中みどり	(女子栄養大学)
	小山正	(神戸学院大学)
	廣澤満之	(目白大学)
指定討論者：	秦野悦子	(白百合女子大学)

[企画主旨]

エコラリア（反響言語）は自閉症の特徴としてカナーに指摘されて以来、他者の話したことばの意味を伴わない反復として、その病理性が注目を集めてきた。しかし、コミュニケーション上の多様な機能も認められ（Prizant & Duchan, 1981）、コミュニケーション発達の一過程として子どもの側からその積極的な意義を評価したり、エコラリアを生じさせる関わり手の要因を明らかにしようとする研究も見られ、エコラリアからの発達支援の可能性が模索されている。本シンポジウムでは発達障害児における即時エコラリア・遅延エコラリア双方の消長の過程を整理してその発達の意義を明確にし、保護者への調査結果も勘案してエコラリアからの発達支援を考える手がかりとしたい。

まず、自閉傾向のある知的障害児の1年余りにわたるエコラリアから会話への展開事例を報告し、次にエコラリアの発達の意義について話題提供をお願いし、さらに自閉性障害児の保護者のエコラリアへの理解の調査結果から保護者への支援を考え、最後に指定討論者からの討論を交えて発達支援の多様な可能性についての論議の場としたい。

「エコラリアから自然な会話への発達と対人行動の変化」

田中みどり（女子栄養大学）

支援開始時に小学校2年生で特別支援学級に在籍中の自閉傾向のある（CARS 27.5）知的障害児（精神年齢3歳後半）のエコラリアの多い段階から他者の意図を汲んだ会話への発達過程と対人行動の発達との関わり（小池, 2011）について報告し、発達促進的関わりについて考える。

対象児：支援開始時7歳8ヶ月、首都圏の小学校特別支援学級に在籍。家族：両親と姉・兄・本人の5人家族。支援歴：2歳11ヶ月時に軽度精神発達遅滞、7歳3ヶ月時に児相にて中度精神発達遅滞・自閉傾向ありと診断され、2歳11ヶ月時と7歳4ヶ月時にグループ療育を受ける。2年生の1学期から支援者が週1回特別支援学級で人との関係を楽しめるようボランティアの教育補助者として関わる。<第1期：関わりの始まり>休み時間は一人遊びが多いが、K君の好きな作業を笑顔で一緒にすることができた。距離があると目が合って笑うが、距離が取れていないと顔を左右に振り目が合わないようにする。ことばのやり取りでは「K君、上手だね。」とダンスを褒めると「上手だね」、「K君、頑張れ！」とことばをかけると「頑張れ！」と言うなど、1語文のエコラリアのような応答が多い。

<第2期：指さしなどによる多様なコミュニケーションの始まり>伝えたいことを指差し、「ん！ん！」と笑顔で言ったり、自発的に手を振って別れの挨拶をするなどコミュニケーション行動が増加。支援者と目が合うのを待ち、目が合うと指差して伝えようとする。支援者のことばを肯定する意味でのエコラリアが多い。

<第3期：接近行動の増加と自発話の増加>他児と遊ぶ支援者にK君から接近し、他児も一緒に遊ぶ場の雰囲気共有することが増える。支援者に手を振り一人で走っていたので後ろから追いかけて「捕まえた！」と言うと「きゃー、鬼ごっこ！」と応えたので「K君、鬼ごっこしようか？」と誘うと「鬼ごっこする！」と言って鬼ごっこをするなど、自然な会話が増える。自分から話しかけることも多くなり、一人遊びが減少。知能検査時には「すぐに終わるからね。」と遅延エコラリアが見られた。

<第4期：文脈に合った言動の増加>近距離でも他者から目をそらさなくなった。支援者からの質問に正しく答え他児と衝突しそうな時適切に要請する等、言語コミュニケーションが豊かになり始める。

支援者との共感的関係の築きやすさがコミュニケーション発達の基礎になっていると推定される。

「エコラリアの発達の意義—その時期にみられる物への志向性と他者のことばの自己化—」

小山正（神戸学院大学）

本シンポジウムでは、私たちが発達支援を行ってきた事例の中でエコラリアがみられた自閉症スペクトラムの事例を通して、エコラリアの発達について、特に対物行動における物への志向性や他者のことばの自己化という観点から考えていきたい。

エコラリア(echolalia)は、自閉症スペクトラムの子どもの前言語期から言語獲得期によくみられるものである。西村(1995)が指摘しているように、エコラリアと定型発達の言語発達上でみられる「発達のおうむ返し」「模唱」とは区別される。エコラリアには、即時反響言語と遅延反響言語があり、遅延反響言語には、子どもの伝達意図や意味が込められている(小山,2000)。

即時反響言語は、前言語期、象徴機能出現前期にみられ、事例によっては同様の発達時期にあっても即時反響言語がみられない事例もある。いずれの事例においても前言語期から言語獲得期においては、対物行動のレパートリーは限られているが、即時反響言語がみられる事例では、物を介させずに自己受容感覚を楽しむ遊びが多い。それに対して、即時反響言語がみられない事例では、事物を用いた感覚運動的遊びを展開していく。もちろん、この両者では、即時反響言語がみられる事例のほうが自発的なことばの出現は早い。また、即時反響言語にみられる抑揚の単調さに関しては、基本的信頼をおく他者との間での子どもにとっての快の情動的交流によって、抑揚が豊かになってくる。このことは、このような事例の後の自発的発話につながっていると思われる。さらに、抑揚の単調さは、療育者との遊びにおいて、子どもが主体的になってくるにともないみられなくなる。

遅延反響言語に関しては、そのソースが興味深い。他者から投げかけられたことばやフレーズであったり、DVDやビデオからのセリフ・フレーズであったりすることが多い。遅延反響言語の場合には、その内容の変化に着目しなければならない。そして、遅延反響言語は、ひとり言(自己内対話)につながっていく。また、遅延反響言語に含まれる意味や伝達意図が周りの他者に理解されること(子どもの側からいえば通じる体験)によって、他者のことばの取り入れが始まってくる。おうむ返しと一般に言われているものの中にこのような他者のことばの取り入れがみられてくる。この時期には日常生活経験の中で他者とことばを交わすことが重要である。その過程で他者のことばの自己化が深まり、新たな語彙の増加や語連鎖がみられてくる。

エコラリアの変容には、他者との関係性の過程での他者認識の発達と物への志向性や対物活動との関連性が関わっていることが明らかである。

「エコラリアに対する保護者の理解」

廣澤満之（目白大学）

Prizant et al.(2003)のサーツモデルに代表されるように、自閉性障害児のエコラリアを言語発達段階に位置づけ、コミュニケーション手段として積極的に利用していくことが発達支援の一部として位置づけられるようになってきた。また、積極的に自閉性障害児とのコミュニケーション手段として利用するためには、関わり手が意味を見いだすことの重要性が指摘されている(廣澤・田中,2008)。ただし、このような積極的に利用することは、自閉性障害児に関わる全ての関わり手が行うわけではない。たとえば、自閉性障害児の保護者であれば、通常言語を獲得させたいという意識からエコラリアを抑制するという関わりを行う可能性もあるであろう。本発表では、自閉性障害児の支援者と位置づけられ、多くの時間を共にする保護者が、エコラリアをどのように理解しているかという点を検討する。

エコラリアには、多数の機能が含まれていることが明らかとなっている(Prizant & Duchan,1981; Prizant & Rydell, 1984などを参考)。そこで、類似の機能を機能群としてまとめ、それぞれの機能群に対して、①保護者がどのような意味づけを行っているか、②保護者はエコラリアに対してどのように応答するかという2点について、面接を通して質問した。その結果、以下の3点が明らかとなった。①エコラリアの発達段階に関わらず、保護者はエコラリアを自閉性障害児とのコミュニケーション手段として利用することの意義を経験的に理解していること、②生活年齢が高くなるにつれ、社会的状況下でのエコラリアを利用した関わりを抑制するニーズを感じていること、③特に子どもの生活年齢が低く、エコラリアの初期発達段階にある自閉性障害児の保護者にとっては、発達的な見通しを持ったエコラリアへの介入方略を伝えることが重要であることであった。これらの知見は、エコラリアをコミュニケーション手段とする自閉性障害児への発達支援だけでなく、その保護者を支援する視点として意義があると考えられた。